D 6　集合住宅地の戸外生活の場に関する研究

奈良女子大学　北口 照美

目的、集合住宅の戸外空間は、公園緑地、歩行者専用道、住棟間空地などに分かれる。これらは、環境形成、移動、レクリエーションなどの場としての役割りを果たしていると言える。これらの計画されたものを、人々はどのように利用し、評価しているのか。人々の反応から外部空間のあり方を考えたい。本報では、公園緑地、歩行者専用道を主とした。

調査、大阪府泉北ニュータウン、奈良市平城ニュータウン。昭和55年12月、56年2月、57年6月。方法は観察と聞きとりによる。

結果

□人数・年令　午前中は主婦と幼児、午後は小学生が多数を占める。

□人々の分布場所と行動　歩行者専用道―通行、立話、遊び。公園・プレイロット―グループでの球技、遊具利用。住棟間空地―キャッチボール、あそび、立話。その他保存緑地・のり面―通行、あそび。

□歩行者専用道に対する評価　良い―雰囲気。緑、樹木の存在。安全性。　悪い―自転車、バイクの通行は危険。夜間の通行に不安。坂が急で疲れる。

以上のようになり、歩行者専用道は買物、通学には利用されるが、通勤には用いられにくい。坂の勾配については、丘陵地に開発されるニュータウンが多い今日、重要な問題である。遊びの場について年令差が影響するが、計画されていない場、つまり住棟間、保存緑地、造成のり面などでも見られる。樹木保護やよりよい外部空間のあり方からも、考えてみるべき点が多い。